

コラム 72— 敵国等に感動を与えた日本軍の敢闘精神

<シドニー軍港を奇襲した3隻の特殊潜航艇>

1942(昭和17)年5月31日、日本海軍3隻の特殊潜航艇が、オーストラリア・シドニー軍港を奇襲します。6月5日、日本の大本営が「シドニー軍港の強襲によって敵軍艦1隻を撃沈したが、潜航艇3隻はまだ帰還していない」と発表しました。

3隻の特殊潜航艇の奇襲の状況は、次のようであったとされています。

1番目に出撃したのが、中馬兼四大尉と大森猛一1等兵曹が乗った潜航艇でしたが、この中馬艇は防潜網に引っかかり、身動きがとれず、艇が敵の手に渡ることを恐れ自爆します。

2番目に出撃したのが、伴勝久中尉と芦辺守1等兵曹の乗る潜航艇で、この潜航艇から発射された魚雷によって、軍艦「クタバル」を撃沈します。だが、伴艇も打撃を受け、母艦にたどり着くことなく、そのまま深海の底に沈んでしまいました。

そして3番目に襲撃したのが、松尾敬宇(けいゆう)大尉と都竹(つづき)正雄兵曹長の乗った潜航艇で、松尾艇は敵の哨戒機からの爆雷攻撃の直撃を受け、身動きができなくなったため、2人は拳銃で頭を打ち抜き、抱き合うようにして自決したのであります。

オーストラリア海軍は、湾内で沈没した3隻のうち、中馬艇と松尾艇の2隻を引き揚げ、6月9日、4人の海軍軍人に対して、海軍葬(写真)の礼をもって弔いました。海軍葬の推進役となったシドニー地区司令官・ムアヘッド・グールドは「日本から1万キロ離れたシドニー軍港に対して、鉄の棺桶に乗って突入した勇氣は、一民族のものではない、全人類のものである。オーストラリアの青年諸君、日本軍人の千分の一の愛国心をもって、国のために尽くしてもらいたい」と弔辞を述べました。



海軍葬

葬儀終了後、4人の遺体は茶毘に付され、8月13日、横浜港に喪の凱旋(写真)をしました。特殊潜航艇は、その後永久保存の手が加えられ、キャンベラの戦争記念館とシドニーに安置されています。毎年5月になると、オーストラリアのマスコミは「深海からの勇者たち」という特集を組み、彼らの勇氣を讃えています。



喪の凱旋

上記4人の海軍軍人のうち、松尾敬宇大尉と都竹正雄兵曹長の記録をまとめた「軍神松尾中佐とその母、都竹兵曹長」(著者・田尻健次氏)によると、松尾大尉と家族の最後の別れの状況が次のように述べられています。

松尾大尉は、特攻出撃(後の回天特別攻撃隊のように体当たりで敵を葬る必死の作戦ではなかったが、生還の可能性はきわめて低かった)する前の昭和17年3月29日(戦死は5月31日)、呉の古林という旅館に、両親と姉の4人を招き、最後の一時を過ごしました。大尉はかねてから父に、菊池千本槍(短刀)を持ってきてほしいと頼んでおりました。千本槍というのは、勤皇の武将菊池武重が考案したもので、小刀を青竹の先につけ、槍ぶすまを作って集団突撃する戦法

です。大尉の先祖である菊池一族は、これを短刀に改作して、菊池精神のシンボルとして秘蔵してきました。

母はお嫁入りの時の丸帯の紫金襷で袋を作り、その中に千本槍を入れて呉まで持参しておりました。一家が和やかなひと時を過ごした後、大尉が「お父様、千本槍は」と尋ねました。父は袋に入れたものを取り出すと短く「お前の望む千本槍だ。菊池精神でゆけ」その声はしめやかに張りつめていました。大尉はおし頂いて手にすると、「これこれ」とつぶやきながら鞘を払い、ジーンと見入っていました。それは物凄いまでの気魄でした。その時の模様を母は次のようにもらしております。

「千本槍を渡して納めるまでの時間は、1 分間ほどの短い時間でしたらうか。そばにいてゾーンとしました。身の毛もよだつとはそのことでしょうか。それまであの子は一言も出撃のことはもらしませんでしたが、もう帰ってこない気持ちでおることが、はっきりと判りました。いかなる俳優もその時の複雑な演技はできないと思っています。」

夜になって旅館の女中さんが床を5つ敷きました。家族5人寝るのだから5つ。すると大尉は4つにしてくれと頼みました。女中としてはわけが判りません。いぶかりながら聞き返すと、今夜はお母さんと一緒に寝るともらしました。当時26歳の大尉は、最後の一夜をお母さんに抱いてもらって寝たのであります。これは尋常一様の人にできることではなく、死と対面した者の最高の孝養といえるものであります。このお母さんに抱いて貰うという、「孝」に生きて出撃した人は、松尾大尉だけではなく、大尉の指揮する艇に同乗した都竹兵曹長も、同じように母を呉まで呼び、下宿の一室で添い寝の一夜を持っているのであります。多くの戦死者の中には、最後に「お母さん」と叫んでいった人が多かったと聞きますが、特攻隊員の中には出撃の前、母のふところに帰って出発した人がたくさんいたそうです。後日、松尾大尉のお母さんは次のようにしみじみと述べています。

「敬宇を抱いて寝たあの夜のことを思うと、今も胸がジーンと締め付けられるように熱くなります。あの時の息子の肌のぬくもりが今も忘れられません。後になってわが子の血で染まった千人針が、オーストラリアの戦争記念会館に安置されていると聞かされた時には、返してもらってもう一度抱きしめて寝てみたいと思いました。」

さらに、松尾大尉の母であるまつ枝さんについては、次のような後日談があります。

1968（昭和43）年4月28日、1人の日本人老女がオーストラリアの土を踏んだとき、カメラのフラッシュがまばゆいばかりに老女を包み込んだ。オーストラリアの新聞は、1面トップに老女の写真を掲載し、この日の見出しを「母きたる」として大きく取り上げた。そしてそれ以降、この「勇者の母」の動向を連日のように写真入りで報じたのであります。

当初、このオーストラリア訪問に際して、日本の外務省は旅券の発行を渋っていました。当時、日本はオーストラリアとの交易をめぐる、外交懸案が発生していたのです。この状態でシドニーを攻撃した軍人の母親が訪問すれば、オーストラリア国民の感情を逆なでして、外交問題になるかもしれないと外務省は恐れました。「オーストラリア訪問は、佐藤首相が外交懸案を解決してからにできないだろうか？」これが外務省の答えでありました。だが、まつ枝さんは、毅然として言いました。「わたしは行きます」と。

まつ枝さんにはオーストラリアの思いが分かっていた。このような状態だからこそ、自分が行ったほうが、日豪関係が好転すると信じていたのです。そして事実、オーストラリアはまつ枝さんを最大の歓迎を持って迎え、「世界の戦死者の母のシンボル」とまで賞賛したのであります。今回のまつ枝さんのオーストラリア訪問は、オーストラリア海軍が松尾大尉を含む4人の日本海軍軍人の遺体を「海軍葬」の礼をもって、厳粛に葬儀を行い、戦争中にもかかわらず、4人の遺骨を日本に帰国させたことに対する「答礼」をすることでありました。この答礼団は、松尾まつ枝さん、



まつ枝さんの豪州訪問

松尾大尉の実姉佐伯ふじえさん、そして松本唯一博士の僅か3名でした。松本唯一博士は九州大学教授などを歴任し、今回のまつ枝さんのオーストラリア行きを呼びかけた発起人です。

当初集まった人たちは趣旨に賛同しても、まつ枝さんが83歳という高齢であること、資金集めが難しいということで難色をしめしました。だが松本唯一博士が自分の家屋敷を売り払う覚悟で呼びかけたところ、教え子や旧海軍関係者などから支援金が集まり、当初の予定額170万円のところ408万円が集まったそうです。また、松本博士は、ハーバード大学出身であるので、この答礼団の通訳を担当しました。

一行は到着するとまず、船でタスマン湾を見渡せる場所にやってきました。すると徐々に雨がパラパラと降り出し、海は次第に荒れはじめてきました。するとまつ枝さんは、未だ揚収されていない伴艇に向かって「伴さん……。芦辺さん……」と降り出した雨の中で、深海深く眠る伴たちに聞こえるように、渾身の力で叫んだ。老女にこのような声が出せるのかと、驚くほどの力強い声でありました。まつ枝さんは日本を出発する前から、軍艦「クタバル」を撃沈しながらも帰還できず、海の藻屑と消えた伴艇のことが気になっていました。まつ枝さんは、ただわが子の霊に対面するためでなく、ともに戦い戦死した6人の霊と対面するためにやってきました。この伴艇は、2006（平成18）年11月26日、シドニー北海岸から5.5キロ地点の海底で、フジツボに覆われた特殊潜航艇をダイバーたちに発見（写真）され、民放テレビによって全国に報道されました。いままで何度も艇が見つかるたびに、「伴艇ではないか？」と報道されたが、今回は間違いなく本物だと確認されたのです。12月1日、文化遺産担当大臣イアン・キャンベル上院議員は、これが本物であることを認めたと、この日本海軍軍人への敬意のしるしにと、再度海にもぐって伴艇に花を供えたという。オーストラリアが戦没者をたたえる精神は、現在まで脈々と続いているのです。その後、一行が戦争記念館に到着すると、館長が出迎え、



特殊潜航艇の発見

また、発見者の1人であるダイバーのアラン・サイモン氏は、この日本海軍軍人への敬意のしるしにと、再度海にもぐって伴艇に花を供えたという。オーストラリアが戦没者をたたえる精神は、現在まで脈々と続いているのです。その後、一行が戦争記念館に到着すると、館長が出迎え、

特殊潜航艇へと案内した。これは、引き上げた松尾・中馬の2艇をつないで復元したものであった。まつ枝さんは、その感慨を次のように歌っています。

「愛艇に 四つのたましひ 生き生きて 父をよぶこえ 母をよぶこえ」

ここで館長から、松尾の「血染めの千人針」が手渡されます。千人針とは1枚の布に、千人の女性が赤糸で1針ずつ縫い、千個の縫い玉を作った布です。戦時中に、出征兵士の武運長久を祈って贈られたものです。この千人針には、松尾が自決したときの血が染み渡っていました。まつ枝さんは額に入った千人針を受取ると、涙がポタポタと千人針の上に滴り落ちました。館長も涙を流し、カメラマンたちも感動のあまり、その光景にシャッターを切る音が途絶えたといえます。

その後、5月2日にゴートン首相と会談した。そのとき、まつ枝さんは、「オーストラリア海軍が戦争のさなかに、我が戦士に示された行為は、イギリス騎士道の発露であり、ここから感謝します」と挨拶しました。この挨拶に対し、海軍のスミス幕僚長は、「それ（シドニーで行った海軍葬）は、日本人が示した勇敢さに対する当然の義務です。それにしても、はるばるオーストラリアを訪れたお母さんの勇気に、改めて敬意を表します」と応じた。ゴートン首相も、「あなたのお子さんは、われわれオーストラリア国民に、真の勇気とは何であるか、真の愛国心とは何であるかを、身をもって示してくださった。ここからお礼を申し上げます」と述べたのであります。

また、まつ枝さんがオーストラリアの新聞記者と会見をした際、ある若い記者が「お母さんは最愛の子供を失って、さぞさびしいでしょう？」と尋ねた。これに対して「日本では、国に忠義をつくすことが本当の親孝行となるのです。私の子供は大きな親孝行をしてくれました。すこしも寂しいとは思いません。ここから満足しています」と答えています。しかし、まつ枝さんは、息子が戦死したあと「君がため 散れと育てし 花なれど 嵐のあとの 庭さびしけれ」という歌を残しています。わが子が死んで寂しくない母などいるはずはないのであります。だが「武士の母」として、外国人記者に対し、国に殉ずる忠義の精神を示したのであります。

翌日の新聞は、「世界の戦死者の母のシンボル」とまで、まつ枝さんを讃え上げたのであります。オーストラリア政府はまつ枝さんに「名誉市民」の称号を与え、佐藤首相の積み残していた外交懸案はことごとく解決したといえます。この奇跡のような外交劇が、なぜ年老いたまつ枝さんに可能であったのか？ 1979年（昭和54年）、まつ枝さんはこの質問に対して、松尾家の床の間に飾られている「教育勅語」を指さして、「あの精神で行って来ました」と話したといえます。まつ枝さんは、オーストラリアの人々のこころを打ち、心を通わすことに成功し、大きな成果を挙げたのです。

日本に帰国すると、このことを知ったあるテレビ局が、まつ枝さん取材に訪れた。事前の打ち合わせで「お母さん、取材の途中でなにを言われてもかまいませんが、最後に戦争は嫌だ、という言葉で結んでください」と頼んだところ、まつ枝さんは「戦争が好きな人はいません。しかし、外国から無理難題を言われれば、やらねばならない場合もあります」と答え、「戦争は嫌だ」で結ぶことを拒否したのであります。後に、まつ枝さんは「戦争が嫌だというのは、熱いのは嫌だ、腹が減るのは嫌だというのと同じようなもので、一種の駄々っ子みみたいなものではないで

しょうか。戦争は嫌だというだけで、日本が守れましようか？」と語っています。松尾まつ枝さんは、1980（昭和 55）年逝去します。享年 95 歳でした。

オーストラリアの新聞は、日本の 8 月 15 日のように、5 月 31 日が近づくと特集記事を組みます。また、スチーブ・カラザースの「包囲下のオーストラリア・・・日本の潜水艦攻撃 1942」など多数の本が出版されました。

さらに、トニー・ウィラー監督は、テレビ映画「深海からの勇者たち」を製作し、「勇敢な海のサムライと、彼らを丁重に海軍葬で弔った、オーストラリア側の騎士道精神を世界に紹介したい」と述べ、日本でも取材を行って、放映されました。

故郷の熊本では、有志から集められたお金の余りで、菊池神社の境内に「軍神松尾中佐」の銅像と、父母の歌碑が建立されました。さらに、宝物館には、日本・オーストラリア両国の新聞や資料を収集し、千人針や帽子などの遺品が今でも展示されています。また、松尾中佐の物語は、2006 年（平成 18 年）に、三池崇史監督の手によって「平和への誓約（うけい）～松尾敬宇とその母」としてアニメ化され、感動を巻き起こしました。

松尾大尉とまつ枝さんの物語は、今なお、われわれのところに訴えるものがあります。

<ディエゴ・スアレズ英国軍港を奇襲した 2 隻の特殊潜航艇>

1942（昭和 17）年 5 月 31 日、日本海軍の 2 隻の特殊潜航艇が、アフリカ東岸マダガスカルにあるディエゴ・スアレズ英国軍港を奇襲します。戦艦ラミリーズ（29,150 トン）を大破させ、補給艦ブリティシュ・ロイヤリティ（6,993 トン）は撃沈されます。攻撃後、1 艇は浮上して港内の基地に抜刀斬り込み、2 人とも戦死しました。もう 1 艇は、防潜網をくぐり抜けて湾外に脱出しましたが、岩礁に衝突して動けなくなったため、2 人の乗組員は、艇から抜け出した後、6 月 3 日、ベエタエタという丘までたどり着いたところ、イギリスのパトロール隊と遭遇、英軍の降伏勧告に応じず、2 人は蜂の巣のように撃たれて戦死します。その後、1976（昭和 51）年に、在マダガスカル共和国日本大使館などの尽力により、現地に慰霊碑が建てられました。

この当時の状況を、チャーチルの著書である「第二次大戦回顧録」全 6 巻のうちの第 4 巻には「日本の猛攻」と題し、マダガスカル攻撃について書かれています。これによると、「日本の潜水艦は、ディエゴ・スアレズ港の至近距離まで接近すると、小型潜水艇を発進させた。軍港内に潜入すると、戦艦ラミリーズと近くのタンカーに魚雷を打ち込んだ。その後、乗組員は潜水艇を離れて上陸し、攻撃してきたため、イギリスのパトロール隊は、直ちに射殺した」と書かれ、さらに行を替えて「2 人の日本海軍軍人は、祖国のために献身し、類まれなる功績をたてた。」と結んでいます。

大東亜戦争の緒戦で、日本は赫々たる戦果を挙げ、日本軍の進駐によって、ビルマ、フィリピン、インドネシアをはじめ、アジア諸国で独立の気運が起こり、それはインドまで波及する気配がありました。

イギリスとしては、東インド会社設立（1600 年）以来のインドを手放す訳にはいかず、インドを抑えるためには、マダガスカルを制圧しておかなければならなかったのです。当時マダガスカルはヒトラーの軍門に降伏したフランスのペタン政府の統治下にありました。イギリスのチャー

チル首相は、「早いうちにマダガスカル島を占領しておかなければ、日本海軍が占領するかもしれない。マダガスカルの北端にあるディゴ・スワレズ軍港に、日本海軍が入ったら、インド洋は日本に制せられ、インド独立の気運が一举に火を吹き、それはアフリカに及ぶ」と考えました。そこでイギリスはフランス軍と激戦を交え、7 百名の犠牲を払って、ディゴ・スワレズ軍港を占領しました。そこを狙って、日本海軍はディゴ・スワレズ軍港の攻撃を行ったのです。

ディゴ・スワレズ軍港の攻撃を行った特殊潜航艇の 4 人の搭乗員は、秋枝三郎大尉（写真）と竹本正巳 1 等兵曹が 1 隻に乗り、もう 1 隻には、岩瀬勝輔少尉と高田高三 2 等兵曹が乗り込みました。秋枝大尉は出陣する前、文子夫人からせがまれて結婚し、結婚後 2 週間しかたっていなかったそうです。

4 人とも攻撃が終わったら生還するよう、山本連合艦隊司令長官から、くれぐれも言われておりました。いよいよ 5 月 30 日午後 5 時半、発進する前、艦内で缶詰の赤飯があげられ、壮行の小宴が士官室で行われました。艦長から「刀を持ってゆくか」と聞かれると、秋枝大尉は、「やっぱり持ってゆきましょう。武士の魂ですから」と答えたそうです。

母艦から離れた 2 隻の特殊潜航艇のその後の活躍は先に述べたとおりですが、マダガスカルの現地の人々は、彼らの執念と壮挙に対して、今も異口同音に感動し、その勇気を讃え、英雄として評価しております。

日本軍人の勇者の魂は、皮肉にも現代の日本人の心の中ではなくて、現地の人々の心の中に生きております。

<アッツ島守備隊の玉砕>

昭和 18 年 5 月 12 日、アッツ島守備隊（写真）は強力な米軍（戦艦 3、空母 1、重巡 3、軽巡 3、駆逐艦 12 隻の艦隊支援のもと第 7 師団 1 万 1 千人）の強襲上陸を受けました。孤立した離島で敵の大群を迎え撃つ日本軍は、山崎保代陸軍大佐（死後 中将）

（写真）以下 2 千 4 百名の将兵は勇戦奮闘しましたが、5 月下旬、現地の状況は極めて苛酷な事態に追い込まれました。この状況は、毎日、陸下に上奏さ

れ、5 月 24 日の参謀総長上奏の際には、陸下より「山崎部隊は本当によくやっている」という趣旨の御沙汰があり、直ちに参謀総長から現地部隊に伝達され、山崎部隊長からも「恐懼（きょうく）感激、最後まで善戦健闘する」旨の返電がありました。

5 月 29 日、現地部隊最後の夜襲攻撃に先立ち、決別の電報が大本営に入り、それには本電発信とともに暗号書を焼却、全無線機を破壊するとあり、誠に悲痛極まりない最後の電報でありました。

当時の参謀総長、杉山元帥がアッツ島玉砕を昭和天皇にご報告に行かれたときのこと、これについては元帥に同行された瀬島龍三氏の回想録に次のように記されています。

「陸下は静かに奏上をお聞きになり、何もご下問はなかった。アッツ島守備隊の将兵を追悼さ



Property of Special Collections, University of Washington LIB
アッツ島守備隊



山崎保代
陸軍大佐

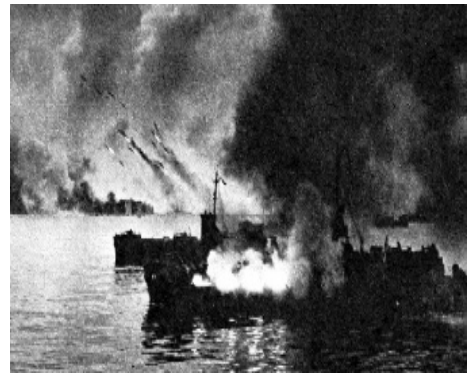
れているように拝察した。ただ御一言だけ、『部隊の将兵は最後までよくやった。このことを伝えよ』と仰せられた。畏れながら、ただいま奏上いたしましたごとく、既に最後の総攻撃に入り、無線機は破壊していますので、聖旨をお伝えすることはできませんと申し上げると、陛下は『それでもよいから電波を出してやれ』と仰せられた。無線機はもう壊れているのです。もう届かないのは分かりきったことなんだけれども、『それでもよいから電波を出せ』と。『帰ったらすぐに電波を出せ』と、もう1回念を押された。こと切れた子供の名を呼び続ける親のような大御心だと拝察された。」

母親は、子供が死んで息絶えた後も、その「なきがら」をだきしめて子供の名を叫び続ける、それと全く同じ君臣の情であったのです。

また、このアッツ島の玉砕戦に参加したアメリカ軍の中隊長であるハーバード・ロング中尉は、日本軍最後の攻撃について、次のように回想しています。「日本軍最後の攻撃があった日、濃霧が立ちこめ、100メートル先も見えないありさまであった。すると異様な物音がするので、敵襲かと構えてみると、300～400名の一団が近づいてくる。先頭は山崎アッツ島守備隊長であったが、右手に日本刀、左手に日の丸を持って迫ってくる。だが、どの兵も負傷しているためか、最後の突撃でありながらも、足を引きずりながらゆっくりゆっくりと、青白い顔をしながらボロボロの服をまとって、鬼気迫る表情で近づいてくる。このさまをみて、我々アメリカ兵は、身の毛がよだつ思いであった」

<ペリリュー島守備隊の玉砕>

1944(昭和19)年9月15日、米軍が、ペリリュー島に上陸を開始します。ペリリュー島の戦い(写真)は、硫黄島の戦いと並び称せられる太平洋方面の激戦であり、米軍はフィリピン攻略のため、その背後の守りとしてのペリリュー島を陥落させるべく、総兵力4万2千人と約800隻の艦艇を出撃させました。対する日本軍守備隊は、総兵力1万2千人でした。



ペリリュー島の戦い

ペリリュー島の島民は、白人の統治時代と日本統治時代の両方を経験しているので、日本時代がいかに良いものであるかを知っていました。島民は老若男女を問わず日本軍と仲良くなって、互いに心からの信頼を寄せていました。島民が飛行場の建設を手伝う合間に、日本の歌や文化について教えてもらったりしては、ともに歌い笑いあう関係にまでなっていました。



中川州男陸軍大佐

ペリリュー島の守備に当たっていた中川州男(くにお)陸軍大佐(戦死後 中将)(写真)は、米軍の上陸前に、島民を戦渦に巻き込まないように、船舶をかき集め、空爆の少ない夜間を狙って、島民全員をパラオ本島に避難させました。

ペリリュー島に徹底的な艦砲射撃と空爆の雨を浴びせた後、米軍は上陸して来ましたが、当初、数日で落とせると楽観視していた米軍は、手痛い打撃を受けることになります。智将・中川大佐

は、これまで水際で敵軍を迎え撃とうとしては、艦砲射撃で撃滅された日本軍の教訓から、島の奥深くまで洞窟を掘って要塞を築いていました。そのため米軍の艦砲射撃などは、日本軍に致命傷を与えておらず、洞窟から出ては消え去る神出鬼没のゲリラ戦の前に、米軍の上陸部隊は大打撃をくらい、2度までも上陸に失敗することになります。中川大佐のペリリュー島の戦法は、のちに栗林忠道中将に受け継がれ、硫黄島全体を要塞化するきっかけとなっていきます。

だが補給がない日本軍は、圧倒的物量で攻めかける米軍に、日を追うごとに押され、73日目を経過したとき、既に残る兵力は僅か50数名となり、11月24日、中川大佐以下3名は割腹自殺をとげ、最期の電文「サクラ・サクラ」が打電された後、満身創痍の50名は米軍をめがけて最期の突撃を敢行し、全員が玉砕します。戦いが終結してから、パラオ本島から島民が帰り、日本兵の遺体を見て泣き出し、島民は一丸となって日本兵の遺体を手厚く葬りました。

また、敵将・ニミッツ米太平洋艦隊司令長官（写真）は、日本軍人の勇戦を讃えて、次のような詩をつくりました。



ニミッツ太平洋
艦隊司令長官

この島を訪れるもろもろの旅人たちよ。故郷に帰ったとき伝えられよ。この島を護るべく玉砕した日本軍守備隊の勇気と祖国を思う心根を。

平成6年の玉砕50周年にあたって、この詩の和英両文が詩碑（写真）として、ペリリュー神社の境内に建立されました。

1981（昭和56）年、パラオ諸島はアメリカから念願の独立を果たします。そして、パラオの島民に国旗のデザインを公募して選ばれたのが、日本の「日の丸」と同じデザインでした。日の丸は「白地に赤」ですが、パラオ共和国の国旗は「青地に黄」となっています。彼らは、このデザインの由縁について次のように述べています。



ペリリュー神社境内の詩碑

「日の丸の部分が黄色なのは、月をしめす。青地はパラオを囲む四方の海である。月は太陽がないと光り輝くことができない。太陽とは、すなわち日本のことである。ペリリュー島の戦いで戦死した1万を超える日本の戦没者たちは、国を愛する心と勇敢ささえあれば、アメリカよりも強くなれることを我々に教えて、散っていったのである。」

そして、パラオが独立を果たした日、それを記念して、中川隊長以下のペリリュー島守備隊を讃える歌を創りました。島民は現在でも親日感情が強く、沖山豊美（おきやまともみ）（父親が日本人）という日本名をもつ地元の女性は「日本という国は何千年来の伝統を持ち、独自の文化を創り上げてきた。その結晶が天皇と教育勅語だ」と、日本人を見れば語りかけ驚かせるようですが、この歌の作詞者はオキヤマ・トモミと、ジョージ・シゲオという人です。題は「ペ島の桜をたたえる歌」であります。島民は、守備隊が「サクラ・サクラ」という電文を最期に打電して、まさに桜吹雪のように散っていったのを知っていたのです。ペリリュー島には桜はなく、

島民たちも桜を見たことがありません。しかしながら、ペリリュー島守備隊と過ごした楽しかった日々が、玉砕した守備隊から教えられた美しい桜のイメージが、今の日本人以上に気高く美しい桜となって、現地の人々の心に焼き付いているのです。

時が変わって、1996（平成8）年6月17日、ペリリュー島の激戦に参加した2人のアメリカ軍の元軍人を招待して、靖国神社でシンポジウムが開かれました。その席上、千葉大学名誉教授の清水馨八郎氏が次のような質問をしました。「日本は、大東亜戦争でアジア諸国を全て解放したが、この偉業をどのように思われるか？」

この質問に対して、参加したコードリン・ワグナー氏は次のように答えました。「私は太平洋戦争にそれ以上の価値を見出しているものがある。それは日本軍人の忠誠心である。太平洋の島々で玉砕するまで戦い、特攻隊まで繰り出した。祖国に対する忠誠心、その名誉は数千年の価値をもって、語り継がれるであろう。」

また、このシンポジウムとともに参加していたエド・アンダウッド氏も、「日本軍は、勝てないとわかっている戦争を最後まで戦い抜いた。しかもその内部でも反乱は起きず、誰も投降さえしなかった。その忠誠心は天皇の力と知って、ペリリュー島を『天皇の島』と名づけた」と述べました。会場はこの2人のアメリカ人の発言で、大きな感動に包まれました。

<神風特別攻撃隊の出現>

1944(昭和19)年10月25日、大西瀧治郎中将(写真)の命により、神風特別攻撃隊(敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊—この名称は本居宣長の「敷島の 大和心を 人間わば朝日ににおう 山桜花」から名づけたものである)が編成されます。



大西瀧治郎
海軍中将



関行男
海軍大尉

最初の指揮官は関行男大尉(写真)です。関大尉は、米護衛空母セント・ローを轟沈します。関行男大尉がその教え子に残した辞世の句は「教え子は 散れ山桜 かくの如くに」でありました。

特攻隊による米軍損害は、艦艇322隻、人員9,000人以上であり、6,245人(陸軍1,689人、海軍4,556人)の特攻隊員が戦死しております。特攻作戦を考えた大西中将は、最初の特攻作戦を実施した敷島隊の隊員に次のようなあいさつをしています。

「日本はまさに危機である。しかもこの危機を救うるものは、重臣でも大臣でも軍令部総長でもない。むしろ自分のような長官でもない。それは諸氏の如き純心にして気力に満ちた若い人々のみである。従って自分は一億国民に代わって皆に願います。皆の成功を祈る。皆は既に神であるから、世俗的な欲望は無いだろうが、もし有るとすれば、それは自分の体当たりが成功したかどうかであろう。皆は永い眠りにつくのであるから、それを知ることはできないであろう。我々もその結果を皆に知らせることはできない。自分は皆の努力を最後まで見届けて上聞に達するようにしよう。この点については皆、安心してくれ。しっかり頼む。」そして、このあいさつときの感想を、大西中将の門司副官が、次のように回想しております。

「チグハグな感じが無く、純一な雰囲気だったのは、長官は自分が生き残って、特攻隊員だけを死なせる気持ちが無かったからに違いない。はっきりした言葉には出さなかったが、それは私に

も判ったし、搭乗員にはもっと敏感に伝わったようである。命ずる方と、命じられる方に気持ちのズレはなかった。」

大西中将は、昭和 20 年 8 月 16 日、終戦の翌日、渋谷・南平台の官舎で割腹自殺をします。享年 55 歳でした。割腹をしつつ、介錯を禁じ、医者も絶対に呼ぶなと厳命し、8 時間以上苦しみながら絶命されました。

大西中将の遺書

特攻隊の英霊に日す 善く戦ひたり深謝す 最後の勝利を信じつつ肉弾として散華せり
然れども其の信念は遂に達成し得ざるに至れり 吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に
謝せんとす 次に一般青少年に告ぐ 我が死にして軽拳は利敵行為なるを思ひ 聖旨に
副ひ奉り自重忍苦する誠ともならば幸いなり 穩忍するとも日本人たるの矜持を失う勿
れ 諸氏は国の宝なり 平時に処し猶克く特攻精神を堅持し 日本民族の福祉と世界人
類の為 最善を尽くせよ

大西中将の辞世の句 2 首

「これでよし 百万年の 仮寝かな」 「すがすがし 戦のあとの 月清し」

日本の特攻隊について、ビルマの元首相バー・モウは、1944（昭和 19）年 11 月 7 日、日比谷公会堂において「ここで、われわれの最終的勝利を確信している私の第 3 の理由をあげよう。それは全世界を驚かせたもの・・・神風の精神である・・・神風の精神が減びないかぎり、アジアも決して減びない」と演説しています。バー・モウは同盟国だから日本を賞賛したのではなく、純粋に自らの命を捨てて祖国につくす若者に、こころからの讃辞を贈ったのであります。

また、フィリピンで「第一次神風基地記念碑」を建立したダニエル・H・ディソンは、この記念碑で次のように述べています。

「神風エピソードは、まったくの大胆不敵、効果的、実践的でアメリカ軍の戦意をくじく戦略であった。それは精神的偉大さ、いちずな愛国心、想像を超えた勇氣、最高の英雄的行為という点で前代未聞であった。そして、すべての神風隊員の願いは、共存共栄、相互尊重、機会均等とともに、世界の全ての国との平和、友好、協調が永続し、新生日本に繁栄をもたらす“人間記録”として、自分の死が役立つことであった」

日本では戦後、特攻隊の死を「犬死」や「愚行」などと冒瀆する風潮がはびこり、学校でもそのように教えられてきました。今でも、特攻隊の映画ができるたびに、「戦争賛美」などといい、「軍国主義」に繋がると騒ぎ立てるのが日本の現状であります。だが、彼らは決して軍国主義のために戦死したのではなく、愛する人のために、愛する家族がいる日本のために、平等で平和な世界を築くために自分の命を捧げたのであります。

それは、最高の自己犠牲の精神であったのです。

これらを讃えることは、決して「戦争賛美」などではなく、戦争で散華された英霊に対する「崇敬」の念から発するものであります。自国の為に、尊い命を捧げられた人々に「感謝」の誠を捧げるのは、全世界共通の「常識」です。これを、「戦争賛美」とはき違えているところに、戦後日本の偏狭さや非常識がひそんでいるといわざるを得ません。

1979（昭和 54）年 12 月、日韓教育文化協議会の草開省三氏が、韓国の中学校教頭をしていた

張志学氏の自宅に招かれたとき、張氏に次のような質問をしたそうです。「大東亜戦争をどのように思っていますか？」と。すると、張氏は「よい質問ですね。ただ私には少し難しい質問です」と前置きしたあと、次のように語り始めたそうです。

「いつか日本の方々に、お知らせしたいと思っていた話があります。ぜひ聞いていただきたい。私は教頭になる前に視学官をしていました。そのとき韓国では珍しい女性の小学校長がおりました。なかなか優れた方で、男性教師からも尊敬されていましたが、その方は未亡人で子供がおりませんでした。実はその校長のご主人は、韓国ではあまりいえないのですが、特攻隊員として沖縄で戦死したのです。その方は航空隊に入隊すると、死を覚悟したのか、自分の出身校を訪れ、校庭に桜の木を植えたのです。今ではその桜の木も大きくなっています。この未亡人の方が赴任した小学校は、なんとこの小学校だったのです！ 校長は言っていました。『さびしいときは、桜の木の下に立つと心が安まる』と。私はこの話をぜひ日本人に伝えたいと思い、ソウルにいる日本の新聞社にそれとなく伝えると、朝日新聞の記者がこの小学校長を取材に訪れました。すると、記者が『日本の軍国主義がご主人をダメにして申し訳ないことをしました』と述べたのです。いつも謙虚で温厚な校長でしたが、この『ダメした』という言葉に激怒しました。『私の主人はダメされるような人ではありません！ 自分の意思で特攻隊として出撃したのです。ダメされたというのは、人間に対する侮辱です。取材はお断りします！』と。これが私の大東亜戦争観です。」

張氏はこの話をすると、後は何も語らなかったそうです。

大東亜戦争を、特攻隊で亡くなられた人々をあと知恵で評論するのは簡単ですが、そのときに、真摯に生きられた方々のこころを大切にしなければならないと思うのであります。

<硫黄島守備隊の玉砕>

1945(昭和20)年2月16日、米軍は、硫黄島を占領するため、艦船800隻、航空機4,000機、総兵力25万人を投入し、総攻撃を開始します。日本を空襲するために出撃するB-29などの爆撃機は、マリアナ諸島から出撃していましたが、日本の攻撃を受けたり故障した場合は、基地までたどり着けずに、海に落ちることもありました。また、日本の爆撃機が硫黄島を中継拠点とし、米軍の基地を攻撃していたこともあったため、米軍の中継拠点として硫黄島を占領することにしたのです。米軍は3日間にわたって艦砲射撃と爆撃を繰り返し、19日に上陸を開始しました。

一方、硫黄島を守備する日本軍は、小笠原兵団第109師団(栗林忠道陸軍中将(写真))、混成第2旅団(千田貞季陸軍少将)、第27航空戦隊(市丸利之助海軍少将)など総数21,000名が配置され、最後の1兵まで戦おうという強い気概がみなぎっていました。この結果、戦史に残る激戦を36日間にわたって繰り返し、アメリカ軍は2万5851名が死傷、日本軍は1083名の傷病兵以外、全員が戦死しました。この戦闘で、アメリカ軍は圧倒的に優勢な兵力にもかかわらず、死傷者が日本軍を上回ることになりました。



栗林忠道陸軍中将

栗林中将が硫黄島に着任したのは、1944(昭和19)年6月8日であり、硫黄島を守備するにあたっては、ペリリュー島の経験に学びました。海と空から圧倒的物量で攻めかかるアメリカを相

手に、水際で食い止めることは不可能であると考え、地下にもぐって戦う道を選びました。硫黄島に住んでいた住民を本土に避難させ、あとは半年かかって硫黄ガスの吹き出る島に坑道を掘り進め、島全体を要塞化しました。これは困難の連続で、ガスと地熱の影響により作業は5分が限度でありましたが、それでもその坑道は、全長20キロにもおよびました。栗林中将は「バンザイ突撃」を固く戒めておりました。最後の血の一滴までをも、使い切ることを厳命しました。そして、最後の突撃が迫ったとき、大本営に発した電文には次のように書かれていました。

「戦鬪の形勢は、いよいよ最後の瀬戸際に直面しました。・・・圧倒的な物量で陸・海・空から攻撃してくる敵に対して、丸裸同然で健闘を続けているのは、私の喜びとするところです。しかし、執拗な敵の猛攻に将兵は相次いでたおれ、そのため、ご期待に反してこの重要拠点^を敵の手に渡すことが、やむなきに至ったことは、本当に恐れ多いことであり、幾重にもお詫び申し上げる次第です。いまや、弾丸は尽き果て水は枯れ、戦い残っている者、全員いよいよ最後の戦鬪を行おうとするにあたり、よくよく皇恩の恐れ多さを思い、自分の身を捨てることは後悔するところではありません。・・・」

そして、終わりに3首の辞世の句を添えています。

栗林中将の辞世の歌3首

「国のため 重きつとめを 果し得で 矢弾尽き果て 散るぞ悲しき」

「仇討たで 野辺には朽ちじ 吾は又 七度生まれて 矛を執らむぞ」

「醜草しこくさの 島はびこに 蔓みくにる 其の時の 皇国の行手 一途に思う」

硫黄島で戦死した市丸海軍少将が、「大東亜戦争に至った経緯について」、戦死前に、ルーズベルト大統領に、手紙を宛てております。

この手紙は、従軍記者であるエメット・クロージャーによって、1945年4月4日にアメリカに打電されました。その内容はアメリカ海軍の検閲のあと、「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙」をはじめ、アメリカ各紙が一斉に報道し、「デンバー・ポスト紙」の記事では、「ルーズベルトは日本の提督によって叱られた」という見出しをつけています。以下が、市丸少将の堂々とした手紙です。

「日本海軍・市丸海軍少将が、フランクリン・ルーズベルト君にこの手紙を送る。私は今、自らの戦いを終えるにあたり、一言あなたに告げておくことがある。ペリー提督が下田に入港してから、日本は世界と国交を結ぶようになって、100年が経過したが、自ら望んでいないにもかかわらず、戦乱に巻き込まれ、不幸なことに貴国と交戦するにいたった。あなた方は日本の戦争を、軍閥の専横によるものだとか、好戦的な国民だというのが、これは的外れもはなはだしい。真珠湾の攻撃も対日戦争の宣伝に使っているが、日本をこのような行動に追い込んだ事情は、あなた方が最も良く知っているところではないのか。恐れ多くも日本の天皇陛下は、代々の建国の精神として、地球上のあらゆる人々は自分の分にしたがい『その生まれた土地でその生を全うする』という永遠の世界平和を確立することを唯一の念願としているのに他ならない。このことはかつて、『四方の海 みなはらからと 思う世に など波風の 立ちさわぐらむ』という明治天皇の御製に歌われているとおりであり、あなたの叔父のセオドア・ルーズベルト閣下が感嘆したことはあ

なたも知っているだろう。今、われわれはあなた方の物量に優る空・海からの攻撃で圧倒されている状態だが、その精神は充実しており、士気は益々高揚し、歓喜にあふれている。これが天業を助ける信念に燃える日本国民の共通の信念であるが、あなたやチャーチル君には到底わからないかもしれない。あなた方の精神的な弱さを哀れに思い、一言次のことを言い聞かせてあげよう。あなた方は白人、とくにアングロサクソンによって、世界を独占しようとし、有色人種をその野望のために奴隷にしようとしてきたではないか！ 近世になって日本があなた方の野望に対し、有色人種、とくに東洋民族としてあなた方の束縛から解放しようとしたが、あなた方は日本の真意を少しも理解しようせず、公然と日本人種の絶滅を言い出すようになったのである。あなた方は既に十分に繁栄しているにもかかわらず、あなた方の搾取から逃れようとする哀れな人類の希望の芽をどうして摘み取ろうとするのか。大東亜共栄圏はあなた方の存在を脅威にさらすものではなく、世界平和の一翼として世界人類の安寧幸福を保証することに、日本天皇の真意があると理解できる雅量を望んでいる。ひるがえってヨーロッパの情勢を眺めてみても、相互の無理解によって人類が戦うことがいかに悲惨であるか、痛嘆せざるを得ない。ヒトラーが今回の戦争を引き起こした原因は、第一次大戦終戦のとき、開戦の責任をすべて敗戦国ドイツにかぶせ、圧迫しようとしたあなた方の処置に対する反発であることは看過できるものではない。あなた方がヒトラーを倒したとしても、どうやって『スターリン』を首領とするソビエトと協調しようとするのか。およそ世界が強者のものであるとするならば、永遠に闘争はくり返し、ついに世界人類に安寧幸福がくることはないだろう。あなた方はいま、世界制覇の野望が成ろうとしている。あなた方もさぞや得意であろう。だが、あなたの先輩であるウィルソン大統領は、その得意絶頂のときに失脚したのである。願わくば、私の言外の意を汲んでいただき、同じ失敗をすることがないように」

平成6年、硫黄島の将兵が散華されてから50年、かねてのご念願を果たして、天皇皇后両陛下は、硫黄島に慰霊のため訪問されました。そのときの硫黄島での天皇陛下の御製は、

「^{せいこん}精根を^{ひといま}込め戦ひし人未だ 地下に眠りて島は悲しき」
「^{いくさび}戦火に^{いそとせ}焼かれし島に^{あるじ}50年も^{ひま}主なき篋麻は生ひ茂りみぬ」

という2首でした。地下に眠る2万を超える日本の将兵、しかし遺骨が収容されたのは約7,700柱であり、未だ13,000柱余りの遺骨はそのまま地下に眠っているのです。1首めの「精根を込め」という痛切なおことばにはじまり、最後の「島は悲しき」と結ばれる切々たるご表現は身に迫ります。

2首目はあの激戦のあと、今は住む人も稀なところに生ひ茂るヒマが、荒涼たる場所で風にゆらいでいる。耐え難い悲しみに満ちた鎮魂の御製です。その時、皇后陛下は、次の1種をお詠みになりました。

「慰霊地は今安らかに水をたたふ 如何^{いか}ばかり君ら 水を^ほ欲りけむ」

硫黄島は、その名のようにその地下壕には硫黄の臭いが立ち込め、その温度は50度に近いという言語に絶する苦しい戦いでした。それを思うと「いかばかり君ら水を欲りけむ」というお言葉

には、わが子の苦しみを抱きしめる母親のようなおもいが伝わってきます。今、慰霊碑のかたわらには、豊かな水がたたえられています。その一滴でも今は亡き将兵たちに頒（わか）つことができたならと、皇后陛下はお嘆きになっているのです。